

Racinet, Albert Charles Auguste

Le costume historique ; cinq cents planches, trois cents en couleurs, or et argent, deux cents en camaïeu. Types principaux du vêtement et de la parure, rapprochés de ceux de l'intérieur de l'habitation dans tous les temps et chez tous les peuples, avec de nombreux détails sur le mobilier, les armes, les objets usuels, les moyens de transport, etc. 6v.

Paris, Firmin – Didot, 1888. (文献番号 3 – 20)

Hiler P. 732 Colas 2471 – 2472 Lipperheide 93

ラシネェ著

歴史に現れた服装；図版500枚、色・金銀刷り300枚と単色刷り200枚。家具、かつちゅう(甲冑)、日用品、運搬法などに関する多数の細部を伴った、あらゆる時代、あらゆる地域の住居内部の人々の身近な衣服と装身具の重要な型 全6巻

本書の第1巻は、まえがき、著者序文、分類、4部の概要、図版と説明の分析表、歴史上の人物一覧、服飾文献、語彙と索引、裁断と型紙の図版12枚とその説明、製本上の注意、目次からなっている。また第2巻から第6巻までは図版とその説明文に当てられているが、これには第1部から第4部までの計500枚の図版が含まれている。

著者の呼称に従えば、第1部は「古典古代」で、これにはエジプト(9)、(括弧内の数字は図版の枚数、以下同じ)、アッシリアとヘブライ(4)、フリュギア、ペルシア、パルチア(1)、ギリシア(14)、エトルスクとグレコ-ロマン(5)、ローマ(13)、靴型(1)、ケルトまたはゴール、スラブまたはサルマート、ゲルマンまたはチュートン(12)の小計59枚が含まれている。

第2部は「非ヨーロッパ世界」で、オセアニア(7)、アフリカ(9)、アメリカ(7)、エスキモー(2)、アジア諸国(中国・日本・インドシナ・インド・トルコ・ペルシア・シリアなど64)、アフリカ(19)、アジアトルコ(12)の小計121枚が含まれている。

第3部は「ビザンチン以降のキリスト教徒」で、ビザンチン・アビシニア・フランコ=ビザンチン(3)、ヨーロッパ(5世紀から15世紀末までと16世紀の一部、71；16世紀と17世紀の一部、57；17世紀と18世紀の一部、54；18世紀と19世紀の一部、42；19世紀、3)小計230枚が含まれている。

第4部は「国別の近代ヨーロッパ」で、スカンジナビア諸国(8)、オランダ(6)、スコットランド(3)、イギリス(4)、ドイツ(2)、スイス(3)、喫煙具(1)、ヨーロッパとアジアのロシア(11)、ポーランド(9)、東欧諸国(7)、イタリア(4)、スペイン(13)、ポルトガル(2)、フランス(17)、小計90枚が含まれている。

第1巻末尾の「製本上の注意」にも記されている通り、第2巻以下の製本は次の5つの巻に分けてなされるので、合計全6巻構成になる。つまり、第2巻は、第1部の59枚と第2部の図版(プレート)番号60~100まで、第3巻は図版番号101~200まで、第4巻は、第4部の図版番

号201～300まで、第5巻には図版番号301～400まで、第6巻には図版番号401～410までと、第4部の図版番号411～500まで、結局は100枚づつをそれぞれの解説と共にバインドする形をとっている。なお図版は図版番号でなく符号で示されているから、第1巻末尾の符号表 (Tableau de concordance) によるか、その番号をプレートに打ち直しておくといよい。

オーギュスト・ラシネは1825年パリに生まれ、1893年そこで没した19世紀フランスの偉大なデシナトゥールで、とりわけ多色石版印刷の名手であった。彼は本書に先立つ44歳の1869年から1873年までの4年間を費やして「多色装飾文様図鑑」"L'ornement polychrome"(文献番号12-4)を同じフィルマン・デイド社から出版した。本書を刊行し始めるのは、その3年後の1876年で、完結を見たのは11年後の1888年のことであった。そして、彼はその5年後に没している。

19世紀後半は、ヨーロッパの服飾史研究にとって黄金時代で、古典的著作が続々と刊行された。例えばクレッチマーとロールバッハ共著の「諸国民の服装」1860-1864(文献番号7-3)、プランシェの「服装百科もしくは衣装の辞典」1876-1879(文献番号1-3)、ホッテンロートの「古代及び現代諸民族の衣服、家具、野外の道具、武装と武器」1884-1891(文献番号3-18)などはとりわけ著名であるが、この中において、ラシネの本書は質量共に抜群で、類書中の王座を占めている。この評価が一世経後の今日において少しも変わらないどころか、ますます輝きを増しているのは、次の幾つかの理由による。まず第一は、本書の芸術性にある。当時の色刷り石版術の最高の技術を駆使して、格調の高い繊細優美なものに仕立てあげている。第二は科学的実証性に富む点である。図及び解説は当時の膨大な資料を駆使して綿密な検討が加えられていることは、図でいえば第2巻の中の「日本」、解説でいえば第1巻141頁以下の「文献目録」や169頁以下の「語彙」によっても知ることができる。これらは、その後の服装史研究上に多大の影響を与えることとなった。第三は時代・地域の網羅的な広さである。1870年代直後の世界は、

プロイセンのドイツ統一、バルカン半島のオスマン帝国の後退、列強のアジア進出と植民地化など、ダイナミックな歴史上の展開がみられた。アジア、アフリカ、オセアニアなど広大な地域に及んで、10余年にわたる一大集成を刊行した彼の情念の支えとなったものも、こうした時代の動きであったのかも知れない。

図は、第5巻の368図。18世紀前半のフランスの服型：上段の左右はパニエの衣装にマントイルをかけた婦人、中央の2人の紳士はバゴダ袖の長上着を着ている。下段の2人の婦人はパニエの衣装にバグノレット(頭巾)をかぶり、2人の紳士はジュストコールを着ている。

